

センター通信

編集部：北京日本学研究中心センター2階211室

責任編集：山口・王津

[今月号の概要：ニュース、教授御紹介！、旅日記、離任挨拶]

E-mail: bjryzx@public3.bta.net.cn

ニュース

- ◎ 4月30日から5月4日まで、センターの日本人専門家達は洛陽と西安の二つの古都を見学した。中国の悠久たる文化の厚みだけでなく、中国地方都市の変貌ぶり及びサービス業、観光業の現状をも身にしみて体験するなど、いろいろな意味でいい旅行となった。
- ◎ 5月8日午後、センター専門家・千葉大学教育学部教授木村秀次先生（専門：国語学）が「敬語の諸相」をテーマに、三階電教室で公開講座を行った。
- ◎ 5月9日午後、センターの日本人専門家達は胡同巡りを行った。有名な胡同写真家徐勇氏の話を聞いた後鼓楼辺りの胡同をゆっくり散策し、最後は民家に入ってその手料理を満喫した。
- ◎ 5月14日午後、中国人学者扈朴氏がセンター主任厳安生先生の招きを受けて三階電教室で中国文化について語った。
- ◎ 5月15日午後、センター専門家・東京大学法学政治学研究科教授高橋和之先生（専門：憲法学）が「日本の政治制度」をテーマに、三階電教室で公開講座を行った。
- ◎ 5月22日午後、センター専門家・東京女子大学現代文化学部教授山本英治先生（専門：社会学）が「現代日本人の生活と意識」をテーマに、日本国際交流基金北京事務所で開催講座を行った。
- ◎ 5月29日午後、センター専門家・岩手大学教育学部教授野坂幸弘先生（専門：現代文学）が「日本現代文学の新動向の一面」をテーマに、三階電教室で公開講座を行った。
- ◎ 6月3日午後、センター一年生の論文中間発表会があり、日本人専門家の方々、中国人客員研究員の方々及びセンター各研究室の諸先生方が参加し、学生達に問題意識の立て方、論文の書き方、章立ての仕方などの面で学生各自のテーマに沿ってアドバイスをした。
- ◎ 6月5日午後、センター専門家・国立学校財務センター教授天野郁夫先生（専門：教育社会学）が「現代日本の教育改革」をテーマに、三階電教室で公開講座を行った。
- ◎ 6月12日午後、センター専門家・京都大学教育学部助教授辻本雅史先生（専門：日本思想史）が「日本の学習文化—江戸時代から今を見る」をテーマに、三階電教室で公開講座を行った。
- ◎ 6月17日午後、中国社会科学院日本研究所副所長・同所日本文化研究室主任高増傑研究員がセンター文化研究室呉懐中講師の招きを受けて、「中国における日本文化研究の現状と課題」をテーマに、二階会議室で講演を行った。
- ◎ 6月19日午後、センター専門家・大東文化大学文学部教授溝口雄三先生（専門：中国思想史）が「日中公倫理の比較」をテーマに、日本国際交流基金北京事務所で開催講座を行った。

教授御紹介！

氏名： 立花秀正

生年月日： 1951年5月20日 うさぎ年 牡牛座

血液型： B 型

出身地： 東京（東京タワーのすぐ下の病院の2階の部屋で生まれました）

経歴：

大学卒業後しばらくの間、東京の大手町の商社に勤務。「人が製造した製品をただ売り買ひするだけの仕事」と「接待」に虚しさを感じて退職。学生時代から教えることが好きだったのと海外で働きたかったので、日本語教師になるために再度勉強。そして、社団法人国際日本語普及協会（AJALT）に入会、日本語教育学会・日本語教育研修会（理論課程・実習課程）にて研修。

日本では、日本定住を目指すインドシナ難民（ベトナム人、ラオス人、カンボジア人）、外務省招聘研修生、中国人技術研修生、アジア諸国臨床医療研修生（中日友好医院の心臓外科医等々）、企業研修生、在日ビジネスマン等々に教えています。

中国に来る前は、1993年4月から1996年4月までの3年間、国際交流基金派遣日本語教育専門家としてマレーシアのマラヤ大学で日本留学を目指す学生たちに日本語を教えました。

自分の勉強と授業の準備で毎日忙しいですが、充実しているので楽しいです。多分、性に合っているのだと思います。

所属：社団法人国際日本語普及協会（AJALT）

今年目標： 5キロやせること

趣味・特技： テニス、旅行、植物栽培

普段心がけていること： 「油と塩分」を取り過ぎないように注意して、
できるだけ歩くこと。（特に、中国にいる間）

日中関係へのメッセージ：

「パンダと中華料理と萬里の長城」「富士山と東京と新幹線」――日本と中国で相手の国について質問したら、たぶん多くの人々がこう答えるのではないのでしょうか。飛行機に乗ればわずか4時間という近い距離にあり、また昔から交流のあった中国と日本なのに、こんな状況では友好関係が深まるはずがありません。自分自身、今回初めて中国へ来て、今まで知らなかったことをたくさん見聞きして、色々なことを感じました。これから、もっと多くのことを知ると思います。日本へ帰ったら、自分が体験した生のそして最新の中国の様子をできるだけ多くの友人や知人に伝えるつもりです。

学生に一言：

研修生の皆さんが教材や教具が大変不足している困難な状況の中で日本語を教えていることがよく分かりました。今回の研修期間は短いですが、その中でできるだけ皆さんのお役に立てるように頑張りたいと思っています。そして、日本へ帰ってからもお互いに連絡を取り合って、友人として長いお付き合いをしましょう。

氏名： 溝口雄三

生年月日： 1932年7月30日

血液型： A型

出身地： 名古屋市

経歴： 東大文学部卒、名古屋大修士卒、東大助手、埼玉大助教授、一橋大教授、東京大教授を経て現在大東文化大教授。

今年目標： 中国の族譜資料の調査と整理

趣味・特技： なし

普段心がけていること： 清潔な人生

日中関係へのメッセージ： 21世紀後半には、中国は超大国（軍事、政治、経済、文化）の位置を不動のものにしていると予測されます。私が心配しているのは中国の知識人の中の根強い文化的中華主義です。今私が日中文化交流の中で努力をしていることは、文化の多元的な見方を中国の、特に中国文化の研究者の間に広めることです。彼らが、中国をヨーロッパとの東西対抗の図式だけでみるのではなく、アジアの一国という自己の相対的認識をもってくれるよう、私の研究を通じて働きかけています。皆さん、どうかこのことを理解して下さい。

学生に一言： センターが中国化するなか「中国の日本学」、「外国研究としての日本学」の樹立という目標を打ち立てはじめている時、どうか皆さんも、中国人でありながら、しかも文化的には中国文化の伝播先としてしかみられていない日本を研究対象とすることの意義を、中国人の立場で考えて下さい。「中国人である自分は、何を目的として日本を研究するのか、それは中国や自分にとってどういう意義があるのか」と。

氏名： 天野郁夫

生年月日： 1936年1月7日

血液型： O型

出身地： 神奈川県真鶴町（箱根山の麓・小さな港町です。伊豆で挙兵した源頼朝が破れて、上総へ逃げるため、舟を出したところとして知られています）

経歴： 一橋大学経済学部・東京大学教育学部卒業。東京大学大学院教育学研究科修了（博士）。国立教育研究所・名古屋大学を経て東京大学教育学部。1996年定年退職後国立学校財務センター研究部教授。

今年の目標：目標を立ててガンバル年齢ではなくなりました。

趣味・特技：雑読。濫読。活字ならなんでもいいのですが、とくに愛読している小説は井伏鱒二と藤沢周平。

普段心がけていること：身体も心もリラックス、リラックス。

日中関係へのメッセージ：近代化・産業化における日本の経験に、もっと関心を持つこと。日本側はそれを理解可能な形で伝えることに。中国側はそれが欧米諸国の経験以上に「教訓」に満ちていることに。

学生に一言：大学在職中、少くない数の中国人留学生と接してきました。いずれも優秀な人たちですが、私は常に、中国の問題を研究テーマにするよう、指導してきました。それが日本を知り、理論や方法を身につける早道だと考えるからです。北京日本学研究中心の皆さんは「日本」を研究することを期待されているわけですが、「比較」の視点を忘れないでください。違いに気づいたときに「なぜ」という疑問が生じ、「説明」したいという願望が生まれます。比較は研究のもっとも初歩的で、しかももっとも重要な方法だと思います。

氏名： 高橋和之

生年月日： 1943年12月14日

（私のプライバシーですから、内緒にしてくださいネ）

血液型： A型（この情報は、輸血の場合にのみ利用してください。まちがっても、性格判断などに使って、偏見を持たないように！）

出身地： 岐阜県

経歴： 岐阜高校を卒業後、東京大学に学び、同大学助手、法政大学助教授・教授を経て、東京大学教授となり、現在に至っています。

今年の目標： とりあえずは、中国のことを広く見聞し、無事日本に帰ること。

趣味・特技： テニス、読書（特に異文化に関するものを好んで読む）

普段心がけていること： 健康（年を取るとともに、体のあちこちに問題が発生し、問題の回避・解決に意を用いざるを得なくなってきた）

日中関係へのメッセージ： 中国を直接経験し、少しずつ理解が深まるとともに、中国への好意が増してきたのを感じています。結局は、これが日中関係の基点だと思います。皆様も、日本を経験し、日本を好きになってください。

学生に一言： まず、どんな些細なことでもよいですから日本と中国の違いに気づく目を養ってください。次に、その違いに「何故？」に問うてみて下さい。その答えを探す中で、日本と中国についての理解を深め、「私は何者か」についての自己の確信を形成していくことができるのではないのでしょうか。

氏名： 山本英治

生年月日： 1931年3月11日生まれ。もう高齢者だが他の人はそう見てくれない。

それは嬉しいことかもしれないが時々困ることもある。

血液型： B。血液型による性格づけは正しくないが、明るいという点では合致している。

出身地： 北アルプスが見える富山県。

その故か山登りとなりヒマラヤにまで登りに出かけた。

経歴： 東大大学院で少しは社会学の勉強をしたが、一年後宇都宮大学へ。その後東京女子大学に定着。最初は女性ばかりで落ち着かなかつたが、最近は美しい若い女性と話をしてもトキメキがなくなった（淋しいことです）。

研究は実態調査に基づく地域研究で、地域は、日本国内、中国、南アジア。

今年目標： 中国についてきちんと研究するとともに、一言でも二言でも正確な中国語を習得すること。

趣味・特技： 趣味は山歩き。特技は手品とインチキ手相看。

普段心がけていること： 自然体と前を見て生きること。

日中関係へのメッセージ： 相互の正しい社会文化の理解。お互いに自分の意志ははっきり相手に伝えること。ダメなものはダメ、曖昧な態度はとらないこと。

学生に一言： 正確な知識、客観的な認識力、優れた理解力、大きな構想力、丹念な論証能力（理論的・実証的）の養成——かなり欲張った一言で、これは自分自身でも身に付いていない。学生への一言でなくて自分への一言とってよいかもしれない。

氏名： 木村秀次

生年月日： 1938年1月23日

血液型： O型

出身地： 東京都福生市（難読地名。「ふっさし」と読む）

経歴： 東京教育大学（現在の筑波大学）文学部漢文学専攻卒業。同国語学国文学専攻卒業。文化庁国語調査官、明海大学教授などを経て、現在、千葉大学教育学部教授。

今年の目標： ①当センターにおいて、健康で所期の仕事を達成すること。

②昨秋刊行した『現代漢和辞典』（大修館書店）の補訂を進めること。

趣味・特技： 山野草の栽培、登山、植物観賞（この北京で次々に咲き群れる色とりどりの花を見ることはこの上なく楽しく心が和む。唐詩に詠まれた、あの柳絮が雪のように飛び舞う姿を目の当たりにした時は感激した。早速封筒に入れて日本の友人たちに郵送した。）

普段心がけていること： 健康 忠恕

日中関係へのメッセージ： 北京外国語大学と前任校の明海大学とが提携校であることと今回の訪中とによって、今までに多くの知人・友人を得ることができた。

常に暖かく接し啓発して下さることに心から感謝している。

学生に一言： 日本語学に関して一新しい分野とともに、地道で基礎的な研究成果にも目を向けてほしい。

そして、「行不由徑一ゆくにこみちによらず」（『論語』）。

氏名： 茂木敏夫

生年月日： 1959年4月17日

血液型： B型

出身地： 群馬県新田町

経歴： 東京大学教養学部教養学科（国際関係論）卒、同大学院人文科学研究科博士課程（中国哲学）修了。現在、静岡県立大学国際関係学部助教授。

今年の目標： 中国でなければできないこと（中国の空気を吸う、多くの人と語り合う、中国近代思想史・対外認識に関する歴史的遺址を参観する、档案馆や図書館で史料を閲覧する、など）に専念したい。しかし、いくつかの仕事を抱えてきてしまったため、当面は「両刀使い」にならざるをえません。

趣味・特技： 移動それ自体を楽しむような旅

普段心がけていること： その時その時、置かれた場において、できるかぎりのことをするように思っているのですが、

日中関係へのメッセージ・学生に一言： もちろん複雑な歴史的背景があることを理解するのは大前提ですが、しかしそれにとらわれて、お互いをあまりに特別視してしまうのも問題だと思います。最近の私たちの関係には、例えば東京と北京、沖縄と福建など、国境を越えて価値観を共有する「地域際」関係や「人際」関係が生まれ、それらが互いに競合・併存する状況が形成されつつあるような気がしています。日本と中国という「国際」関係の認識枠組みだけではもう通用しなくなっているのではないのでしょうか。その意味で、皆さんの世代の日本研究が担う役割は、決して小さくありません。

氏名： 金田章宏

生年月日： 1955年9月12日

血液型： B型

出身地： 山形県南陽市

経歴： 埼玉大学教養学部卒、千葉大学留学生センター助教授

今年目標： 昨年締め切りの八丈方言の文法書を仕上げる

趣味・特技： 貝の収集、のみくい

普段心がけていること： 自然に

日中関係へのメッセージ： 初めて中国に来て、様々な「違い」を改めて実感しました。
これを「溝」にしないための努力が必要だと思います。

学生に一言： たいへん意欲が感じられます。地道な努力を積み重ね、説得力のある論文に仕上げてください。

洛陽・西安の旅

その一・洛陽西安旅行雑感

清水昭俊

今回の旅行は私にとって、実質的に中国での初めての観光旅行であり、旅行社があらかじめ日程を組んだ団体パック旅行というのも初めてで、良くも悪くも新しい経験が多かった。その中からいくつかを拾ってみたい。

洛陽と西安は色々な意味で対照的だった。洛陽に着いたのは早朝であり、こじんまりし

た町の朝の光景がさわやかだった。一方、西安に着いたのは夕暮れ時で、駅は中も外も非常な喧騒だった。出口が混んだ原因の一つは、改札口で駅員が無賃乗車らしい一行を取り押さえていたからで、彼らは大変な剣幕で抗議をまくし立てていた。駅前広場も人で埋まる混雑ぶりで、暗いせいもあったが、見渡してもタクシー乗り場はみあたらず、立っていると次々に声をかけてきて何かを誘う者があり、一人で来ていたら大変だったろうなと思わせられた。

洛陽では着いてすぐから、旅行社とはトラブル続きだった。夕食につれて行かれたレストランはサービスが悪く、さらに、翌日の夕食も同じレストランを予定していることが判明して、一行のいざなひは怒りに変わった。辻本先生が代表して強硬に旅行社に抗議し、日程の改善は同行の王さんが相手方と交渉することになった。王さんは、翌日の夜に予定されていた唐楽鑑賞を食事つきに変更するよう要求し、実現した。彼が私に教えてくれたところでは、この変更で旅行社の負担は多くなるはずだが、初日の失態の埋め合わせとして要求されれば、旅行社は受け入れざるを得ない、これがここ（中国）での論理ですよという。

それでも、旅行社が強引な利益追求の姿勢を改めた訳ではない。われわれを連れていった場所で、あらかじめ渡されていたコースには入っていない所が何カ所かあった。始皇帝の兵馬俑に行く前に、兵馬俑の工場に行くという。われわれが不要だと断ると、ガイドは、旅行社と工場との契約だから我慢してくれという。工場といっても見物するものはなく、目的はいうまでもなく、兵馬俑の複製品など製品を買わせるためである。

さらに、唐楽に行く前には、病院に寄って、マッサージでもしてもらいましょうという説明で、解放軍病院に連れていかれた。あらかじめ連絡がしてあったようで、病院では待ちかまえていた看護婦らに、一室に案内された。日本語の巧みな医師が出てきて、中国医学を説明し、病院で製造販売している漢方薬の効能を説く。数人の看護婦が薬の山を持ち込んで、われわれに示す。さらにもう一人の漢方医が加わって、一人一人を診察するという。薬はいずれも一ヶ月分で、日本円で1万円という。ガイドに尋ねると、唐楽に行く時間が、あらかじめ知らされていた時間より2時間遅くなったという。これでは、どこまで病院に商売されるか分からない。私の独断だったが、唐楽に行く前に一旦ホテルに戻って休息したいとガイドに伝え、一行の皆さんにはバスに移って頂いた。

旅行から帰って、中国生活の長い山口先生に伺ったところでは、最近では特に日本人の団体を相手に、病院に連れこんで漢方薬の商売をする旅行ガイドが多いそうである。ガイドが客を連れていった店などから売り上げの何割かのリベートを受け取るのが、商慣習になっているという。われわれも洛陽のガイド氏にはいい商売をされた訳だ。また、解放軍病院までが旅行社と組んで利益追求に走る姿勢には、大げさにいえば、現在の中国の社会主義市場経済の一端を見た思いである。

旅行をするのはわれわれであり、あらかじめ通知されている所以外には行かない、余った時間はわれわれの時間であり、その過ごし方はわれわれが決める。この原則を堅持する

ことが大事だと、改めて思った次第である。

見て回った場所の印象を述べて、締め括りにしたい。洛陽で見た龍門石窟、白馬寺、閔林堂、（墳墓の様子を見せてくれる）古寺博物館は、どれも古拙の印象。これに対し、西安の華清池、碑林、兵馬俑、鐘楼と城壁、大雁塔は、いずれも大規模、洗練、華麗、重厚の言葉がふさわしい。圧巻は西安歴史博物館で、「中国文明の歴史の厚みをたっぷりを見せてもらいました」というほかはない。

西安の印象の最後は、咸陽機場に行くために城壁の北門（安雲門）から出て北に向う道が、延々といつまでもまっすぐに走っていたことである。北京でも一番感心したのは都市計画であり、都市というものの性格を思わせられていた。都市は社会の機能的必要から生まれるものではなく（よく言われるように、東京は都市ではない）、観念的な世界観が地上に作り出したものである。北京でも西安でも、近代以前に築かれた都市のプランが、そのまま現代の都市のプランになり得ていることに感心する。そして、市街の要所に見えた広場もそうであるが、この北に延びる道路には、都市郊外にこれだけまっすぐの道を作ることのできる政治の力を思わせられた。

その二・四都雑感

辻本雅史

私は日本の京都からやってきて、いま北京に滞在中。そして先日、洛陽、西安を旅した。この四つの都市はいずれも古都である。古都逍遙の旅を愉しんできたわけである。

古都逍遙の愉しみとは実は歴史逍遙の愉しみといってもよい。日本史を学ぶ者のひとりとして、悠久の中国の歴史は、万葉や平安の貴族がそうであったように、憧憬の対象にほかならない。『史記』で読んだあの始皇帝や項羽と同じ地に自分が立っていると思うだけで、身中から熱いものがわきあがってくるのを覚える。

夜行列車の後で胸をときめかして見た洛陽の龍門石窟。やや硬めの端正な顔立ちの賓陽三洞の仏には飛鳥仏の、唐代の巨大な廬舎那仏にはふくよかな貞観仏（平安初期）のふるさとを、見いだしてしまう。まさに目の醒める思いであった。中国の古都に日本文化のなつかしいふるさとを発見する反面、やはり強烈なまでの中国文化らしさの印象も小さくない。その巨大さと表現の徹底ぶり。龍門石窟寺院の規模と量もそれを明らかに物語るが、さらに西安郊外のあの始皇帝兵馬俑坑の徹底ぶり。どうも強大な中国では、人の目を瞬間的にあっと驚かせ、感覚的に圧倒するまでの直截さや率直さの文化表現をつねに必要としていたものと思われる。洛陽の閔林堂の閔羽像の派手な原色と執拗なまでの威風堂々ぶりにも、その迫力は日本には絶えて見られない表現であろう。

西安でははからずも唐代の「宮廷料理」を食しつつ「伝統的な」唐楽・舞踊を楽しむと

いう予定外の経験を与えた。その名も「唐楽宮」なる見るからに近代的なホールに案内された。ほとんどが外国人観光客。西洋人などは旅行中なのに正装に近い装い。ステージの中国の楽器演奏のなか、コース料理が進行していくが、よくみればその実態はほとんどフランス料理のアレンジ。そういえばワインもあった。やがてステージは華やかな宮廷風の舞踊と音楽が繰り広げられる。衣装や舞台背景が中国宮廷風のほかに、ほとんど京劇と西洋バレエの折衷調。要するに現代西安の観光ディナーショーというのが正確なところ。

伝統は創られる、というのがそのあからさまな創作（虚構）現場に迷い込み、見るべからざるものをみてしまったような、複雑な思いであった。ただ料理はおいしく、踊り子もショーもひたすら華麗で、堪能した。（私のカメラは特定の踊り子を追っていたことを、現像してみて初めて気づいた）。もし実際に唐代の宮廷料理と唐楽であったとすれば、本当はかえって閉口したに違いない。

現代における「古都」とは観光地である。それは実は歴史も文化もビジネスの資源であることを意味している。至る所に出会う土産物売は、まさに現代中国がビジネスにいかにか忠実であるかの証なのかもしれない。「古都」を旅して、結局「古都の近代や現代化」をみた。もとより日本の京都とて、その本質が変わるところはない。それにしても、西安の碑林の王羲之や顔真卿らの名筆の拓本に興奮して、わが財布をカラにしてしまったのは、文化がビジネス資源としていかに強力であるのか、身をもってした体験であったといわざるをえない。

その三・メーデー旅行の印象

野坂幸弘

今回の旅行の印象は、「暑かった、ビールぬるかった」の一言で済みそうなのですが、あえて断片的に記してみます。

洛陽の二日目、午前中は別行動ということで、私どもは立花氏とともに黄河を観に行きました。確か全長5キロという橋の、河の部分約1キロを歩いて渡って見たのですが、途中で「雨季には今中州になっているところも全て水没します」というガイドの説明を聞いて、その時は本当に凄いのだろうと想像しながら、自分の寄り掛かっている欄干を見ると、そのコンクリートの接合部分が相当にズレていることに気づいてしまいました。凄さを想像する材料が一つ増えたわけです。

洛陽から西安までの6時間半ほどの、居眠りしているのが勿体ないほどに、たとえば人が住んでいるのではないかと思われる洞穴のそばに瀟洒な家が建っていたりして、変化に富んで単調に続く車窓の風景に、中国の広大さを垣間見させられるような、汽車の旅はなかなか良いものでしたが、問題は禁煙列車だったことです。しかし隅の方で公安の腕章

をつけた若者が傍若無人に煙草を吸っているではありませんか。しばらくして、ふと見ると、老女がそこで煙草を吸いながら大声で談笑しています。私はたまりかねて、そこへ行って注意するのではなくて、一緒に吸煙させてもらいました。

得難い経験です。

また別に、西安の最後に見た果物・野菜・鮮魚などの市場で、なぜが野菜売りの露天の列に紛れ込んだ感じで、蛇を売っている若者がいました。寝ころんでいる彼に値段を聞いてもらったのですが、ハナクソをほじりながら80元と答えただけで起き上がる気配は全くありません。中国で物売りに冷たくあしらわれるという珍しい経験をしたと思ったのですが、これは正確に言えば、彼は買い物客のほとんど来ない、げんなりとするような暑さの昼下がりに蛇の傍らで寝ていたのであって、商売をしていたわけではない、ということになるのでしょうか。

「舍不得」——離任にあたって

山口 敏幸

1994年の8月末に着任して以来、2年と10ヶ月が過ぎようとしています。「いよいよ」というか、「とうとう」というか、「ついに」というか、とにかく帰国の日が迫ってきました。

よく「中国はあとを引く」と言われます。「あとを引く」とは、“いったん好きになるといつまでも離れられない”という意味ですが、私の中国との付き合いももう二十年を越えました。やはり相当あとを引いているようです。私自身が自分の意志で何とか中国から離れまいとしているということもありますが、その意志を越えたところの不思議な「縁」といったものもあるようです。3年前、私の赴任先は韓国に内定していました。長かった中国との付き合いもこれで終わりかと思っていました。ところが、赴任間近になって、突然赴任先が北京に変更されたのです。中国との深い「縁」を感じたものです。

ところで、今回の滞在中、ひとつ面白い発見がありました。それは、リヤカーの引き方です。リヤカーは普通の日本人なら「引く」だろうと思います。ところが、中国ではそれを引かずに「押す」のが普通らしいのです。帰国される先生の荷物を運ぶお手伝いをしていたときのことで、私がリヤカーを引いていたら、サービス員がやってきて「それは、こうやって押したほうが楽なんだ！」と言いながら、私からリヤカーを奪い取るようにして前後反対に押していくのです。「いや、日本では・・・」と言いかけた私も、サービス員の自信たっぷりの断定口調に押されて、つい、違和感を感じながらもリヤカーを押してしまったというおそまつ。それ以後気をつけて見るようにしましたが、やはり中国の人は皆押して

いました。そういえば、鋸やかんなも中国では、“押して”切ったり削ったりするそうですから、全く日本とは反対です。どうも日本は「引く派」、中国は「押す派」と言えるようです。

北京にいる間、私はずっと自転車でセンターに通いましたが、最初の頃よく他の自転車や通行人とぶつかりそうになりました。タイミングが合わなかったのです。「人は右、車は左」の習慣が身につけている私が「人は？、車は右」の社会を走るのですから、瞬間的なよけ方（よける方向）が違うというのもあるでしょうが、もう一つ大きいのはやはり「引く派」と「押す派」の違いではないかと思います。中国には、どうも“先に頭を突っ込んだほうが勝ち”というような中国的な「押し」のルールがあるように感じられます。ちょっとでも隙間があれば皆どンドン割り込んできます（これは交通に限らず他の社会場面にも共通するのですが）。ところが、日本人は妙に譲り合ってしまうところがあり、そうした習慣を身につけている私が、「押し」のルールで流れている北京の街路を走ろうというのですから、タイミングが合わないのは当然です。危ないと思ってすぐ譲ってしまう私の運転は逆に周りの人から危なっかしいと思われていたことでしょう。だんだん慣れてくるに従って、私も少しずつ「押し」が強くなり、今では流れに乗って走れるようになりました。

この3年で私も「引く派」から「押す派」に大分変わってきているのではないかと思います。余計な気を使わなくなったという意味でかなり図々しくなりました。「引く派」の日本社会では、自分が相手（或いは周り）からどう見られるかを常に意識して、相手との距離を測りながら行動しますから、どうしても引き加減に構えるという姿勢になってしまいます。押しが強すぎると嫌われますし、出る杭は打たれるのです。しかし、「押す派」の中国社会では、必要以上に相手（或いは周り）を気にすることはないようですし、自分の行動を決めるために相手の気持ちを察するというようなこともあまり必要ないようです（少なくとも外国人である私にはそのように思えます）。余計な気を使う必要がないという点では実に気楽なわけで、こんなところに「あとを引く」原因があるのかもしれませんが。

ともかく、私も久々に日本に帰ります。帰ってから当分は「気の利かない図々しい奴」と思われることを覚悟しておいたほうが良さそうです。

近い将来、中国との深い「縁」にたよって、またセンターに来れることを祈りながら、
再見！